

# エリック・スチュアート・ベルの軌跡と日本への影響に関する一考察

佐久間 美羊

## The Life of Eric Stewart Bell and His Impact Brought on Japan

Miyo SAKUMA

### Abstract

This paper examines the life of New Zealand born, Eric Stewart Bell, who devoted his life to Japan from his arrival in 1922 up until his death in 1964.

Although stories and memories of Bell have been shared among many who knew or knew of him, his achievements and influence on Japanese society have not been widely discussed. His achievements extend across areas which include education, journalism, music and literature. Through them, he aimed to bring awareness and better cultural understanding primarily between Japan and New Zealand, but also between Japan and Australia and other western countries.

This paper concludes that Eric Stewart Bell and his rich legacy should be considered when reflecting on past and future Japan-New Zealand relations.

Key-words: Japan-New Zealand relationship, New Zealander in Japan

### 1. はじめに

日本とニュージーランドは1952年に外交関係を樹立し、今年で70年となる。国交樹立以前からの両国の人的交流を考える上で、ニュージーランドを訪れた日本人に関してはMcNeilの研究<sup>1</sup>が、また、日本を訪れたニュージーランド人を通して日本がニュージーランドへ与えた影響に関してはビーティ&及川の研究<sup>2</sup>などがある。しかし、日本におけるニュージーランド人が果たした役割を論考する研究はない。本稿は、一つの事例として1920年代から1960年代にかけて日本に居住したニュージーランド出身のエリック・スチュアート・ベル<sup>3</sup> (Eric Stewart Bell、以降ベルと記載) を取り上げ、日本とニュージーランドの関係において彼が果たした役割と、日本社会へもたらした影響を考察する。資料は当時の両国における新聞記事、勤務校の学校関係資料、関係者の回想録、そしてベルによる著作物等を使

用する。なお、彼の功績は多岐にわたるが、本稿ではまず彼の功績を総論することを目的とし、各論は次稿以降に委ねることとする。今日に至る日本とニュージーランドの表立っていない知的な営みを明らかにすることで、両国の複層的な繋がりを理解し、さらには今後の両国のさらなる友好関係を築く糸口となることを期待する。

### 2. 生い立ちから青年期まで

ベルは1887年9月21日<sup>4</sup>、共にイギリスからの移民であるチャールズとイヴを親とし、ニュージーランド・クライストチャーチで生まれた。姉のエディスとメイベル、兄のチャールズ、姉のクララ(夭逝)とエヴェリンの6人兄弟の末っ子であり、一番年の近いエヴェリンとも10歳ほど離れていたため、大人たちに囲まれて成長していく。

父のチャールズは織物商であったが音楽に造詣が深く、母のイヴも音楽の教師であったため、音楽の才能あふれる一家であった。ベルは聖歌隊の奨学金でクライスト・カレッジ・グラマー・スクールに進むが、彼の学校生活は暗澹たるものであった。後に彼は学校生活を振り返り、このように述べている。

当時この学校の教師のモットーとしたところのものは、校長を初め最年少の教師に至るまで、『むちを惜しむものは子をそこなう』であった。(中略) わたくしは数学がいちばんきらいだった。(中略) わたくしは予習も復習もいっしょうけんめいしたけれど、打たれないで無事に一学期を過ごせることは殆どなかった。(中略) しかしそれでもわたくしは、それを父母に告げることはできなかった。当時は父母もまた、このようなスパルタ教育が幼い子どもに必要だと信じていたからである。こうして当時の学校生活は、わたくしにひどい恐怖心と大部分の教師に対する嫌悪感をもたせるに至った。<sup>5</sup>

学校を卒業後、幼少期からの友人であるアラン・タイザリッチ(Alan Tytheridge<sup>6</sup>)らとトリオを組み、チェロ奏者として活動する。さらには、クライストチャーチ・サロン・オーケストラを率いるようになり、地元美術館やミュージックホールで演奏をし始める。ベルの腕前は、クライストチャーチで最も優れたアマチュアチェロ奏者と称されるほどであった<sup>7</sup>。なお、タイザリッチとの繋がりは晩年まで続き、ベルの人生において影響を与えた人物の1人といえる。また、兄チャールズのいるオーストラリアに行き、彼の仕事を手伝うなど、いわゆる「フリーター」の生活をしていた1919年、転機が訪れる。立ち寄った書店でアレクサンダー・ニールの著作に出会ったのである。当時、ニールはスコットランドの若い教師であり、教師と児童の間に愛と同情がいかに重要かを説いていた。それは、ベルが受けてきた教育とは本質的に異なる教育観であり、ニールの教育哲学に共鳴したベルはニールに手紙を書き、交

流が始まる。そしてベルは、「彼の書を読み、彼の児童教育に対する優れた見解に接するに従い、わたくしもいつか教師になってみたいと考えるようになる」<sup>8</sup>るのである。

1920年、ベルはタイザリッチと義兄(エディスの夫であるハロルド・ライトバンド)と共にオリエンタル・アーツというアジアからの輸入雑貨を扱う会社の共同経営を始める<sup>9</sup>。裕福な医師の家庭に育ったタイザリッチはそれに先立つ1914年からフィジーやハワイ、そして日本に出かけ、音楽家やジャーナリストとして活動していた。1921年には一橋大学の前身である東京商科大学に外国人講師として着任している<sup>10</sup>。20世紀初頭はニュージーランドにおける第一次日本ブームの真っただ中であり、他の西洋諸国に漏れず、ニュージーランドでも日本の美術品や工芸品がもてはやされていた<sup>11</sup>。また、裕福で教養のあるニュージーランド人の間で日本旅行への人気も高まっていた<sup>12</sup>。そのような状況下でベルの眼差しも日本へと向けられていった。

1922年、ベルはタイザリッチの誘いを受け、日本に行くこととなる。そこで瞬く間に日本の虜となり、初めは数か月の休暇のつもりで行った日本が、彼の永住の地となることになった。

### 3. 日本での生活 戦前期

太平洋戦争以前の彼の日本での功績として注目すべき点は3点である。すなわち、英語教師として、ジャーナリストとして、英文学と日本文学の紹介者として、である。下記に順を追って見ていくこととする。

#### 3-1. 英語教師として

ニールの書に出会ったことで、教師になることを志すようになっていたベルは、来日してすぐに成城学校の職に就く<sup>13</sup>。どのような経緯で職を得たのかは定かではないが、先に来日していたタイザリッチの取次があったことが考えられる<sup>14</sup>。

成城学校は創立当初、久邇宮邦彦王などが通われた士官学校であったが、1916年より澤柳政太郎を校長とし、新教育を進めていた。大正デモクラシーの新しい

学校風土が生まれた時期にベルは赴任したことになる。そしてベルは成城学校で多くの同僚や生徒を感化していく。まず、同僚の霜田静志にニイルを紹介する<sup>15</sup>。後に霜田は日本におけるニイル研究家の第一人者となっていく。また、同じく同僚の英語教師である鷗飼盛治とは日本の文学作品を英語に翻訳し、発表する（詳細は3-3で後述）。さらに、教え子で後にテノール歌手になる奥田良三とは、生涯に渡り支えあう無二の友となる。音楽に造詣が深かったベルは、早くから奥田の才能を認めており、ベルが越谷達之助を紹介したことで奥田が『初恋』を歌うようにもなる<sup>16</sup>。また、後にシャンソン歌手として名を成す芦野宏もベルの教え子であり、芦野は「英語の発音は成城中学時代エリック・ベル先生から直伝のもの」<sup>17</sup>と回想している。ベルは修学旅行の引率で銚子に行った際の思い出として、「生徒は皆親切で、私のポケットは食べきれないほどのお菓子でいっぱいになった」と生徒との親密な様子を紹介し、「成城学校の生徒や教師たちと過ごす時はいつなんどきであれ、私は幸せに包まれている」<sup>18</sup>と結んでいる。

なお、ベルは成城学校以外でも、教鞭をとっていた。筆者が各校に確認をし、把握できた勤務校は【表1】の通りである。

【表1】ベルの戦前の勤務校<sup>19</sup>

- ・成城学校（1922～1941）
- ・法政大学（1923～1925）<sup>20</sup>
- ・横浜商業（1930～1941）\*横浜商業専門学校、横浜商業学校ともに。<sup>21</sup>
- ・早稲田大学（1937～1941）<sup>22</sup>

英語を教えた経験のないベルが、どのようにして英語を教え、生徒に慕われるようになったのであろうか。彼の執筆したテキストブックから検証していく。ベルは、教鞭をとり始めてから10年が過ぎだ1930年代に【表2】で示すテキストブックを出版している。

【表2】ベルが著したテキストブック

- ①*The "English as Speech" Series Volume X, Two*

*Chinese Sketches from a Chinese on a Chinese Screen* by W.Somerset Maugham. Adapted by Eric S Bell, 開拓社、1932

②*A Trip round the World* by Eric S Bell and Eishiro Hori, 中等教科書出版協会、1933

③*A Japanese Schoolboy Visits England* by Eric S Bell and Eishiro Hori, 四條書房、1934、開拓社、1937

④*Short Stories and Fables Simplified with Easy Conversation Lessons*. Compiled and Written by Eric Stewart Bell, 開隆堂書店、1939

①は*The "English as Speech" Series*中等学校用として英語教授研究所によりまとめられた精読用教科書のシリーズである<sup>23</sup>。シリーズは17巻まであり、そのうちベルが関わったのは10巻のみである。英語教授研究所とは、1923年に文部省英語教授顧問のハロルド・パーマーを初代所長として文部省内に英語教育を専門として設立された研究所である。成城学校校長の澤柳が副総裁、慶応大学の堀英四郎が理事に入っている。オーラル・イントロダクションなど音声を中心とした指導法を開発し、英語を英語で教えるダイレクトメソッドを実践している。①は、学習語彙内で易しく書き直されたサマセット・モームの原作を「スケッチ」として紹介した後、「エクスプラナトリー・イントロダクション」（教師による「スケッチ」に関する口頭説明）、「オーラル・ワーク」（文章内容に関する口頭質問）、「コンポジション・エクササイズ」（筆記による単語や文法問題）が繰り返されるオールイングリッシュ構成になっている。ベルは澤柳校長を介し英語教授研究所にも関わることになり、その指導法を実践していったと考える。また研究所を通して堀とも知り合い、②③の共著に至ったと考える。

堀は1902年から1916年まで海軍兵学校で山本五十六などに英語を教えていた。そこでは日英同盟や日露戦争などの国際舞台を通じ、実用的な英語運用力の向上が求められており、堀も早くから音声重視の英語指導法を実践していた<sup>24</sup>。そのため①と同様、②③も会話重視の内容になっている。②は世界旅行に出かけた父親

が、各訪問先から日本にいる息子宛に英語で手紙を送るという内容である。各手紙の後には会話練習がついている。③は②とは逆にハルオという日本人学生がイギリスに留学に行き、日本にいる父親に英語で手紙を送るという内容である。②と同様、各手紙の後には会話練習がついている。ベルは③の前書きに、既存のテキストブックは生徒の興味を引くような内容になっておらず、若者の想像力と興味を掻き立てるテキストブックを作りたかったと述べている。そのため、③は生徒と同世代の若者が海外に行き見聞し、感じたであろう内容となっている。

これらのテキストブックに関して、ベルの独自性を論考する段階にはまだ至っていない。ただ、英語教育の新潮流の流れにベルも位置付けられると述べるに留めることとする。

### 3-2. ジャーナリストとして

日本に初来日した後、日本定住を決めたベルは故郷の身辺整理のためであろうか、1923年2月に一時帰国をする。経由地のオーストラリア・ブリズベンで取材に応じたベルは、成城学校の教師になったことを報告すると共に、オーストラリア人の日本人観を正し、自身が実際に出会った日本人像について次のように述べている。「オーストラリア人は日本人に対して間違った認識を持っていると私は思います。日本人は寛大で平和を愛する人々であると私は感じました」<sup>25</sup>。当時のオーストラリアは、日露戦争における日本の勝利を受け、日本を脅威と捉えるようになっていた。1911年、シドニー日本領事館補である三穂五郎は、日本政府へ、「日露戦争の結果、日本の脅威が豪州人に強く意識されてきた。今日では、日本人への敵意と恐怖が白豪主義の根底にある」<sup>26</sup>と電報を送っている。またイギリス人作家D・H・ロレンスは1922年6月、シドニー滞在中に妻フリーダの姉宛ての手紙に次のように書いている。

オーストラリア人は日本人を酷く恐れている。ほとんど全てのオーストラリア人—特にシドニーの人々は、イギリスがひとたび没落し、列強が介入

することが困難になった暁には、日本はオーストラリアに攻め入り占領するだろうと感じている。彼らは本気でそれを信じている。<sup>27</sup>

太平洋戦争前のオーストラリアにおいて、日本についての情報や日本人との交流は乏しく、直接的な経験の欠落による、明確な根拠に依拠しない対日人種差別的認識と、日本による南進という物理的脅威が加わり、戦前の対日感情が作り出されていたのである。そのような中、一石を投じたベルの発言であったと言える。

以降、ベルは日本に戻ってからオーストラリアやニュージーランドの地元紙に多数寄稿し、世界に日本の姿を発信していく。分野は日本の教育や習慣、芸術、紀行など多岐に渡った。世界で名だたる楽団が日本で公演をし、人々が西洋音楽を愛でていること、日本の学校では教師が生徒に大変好かれており、毛嫌いされている教師を見つけるのが難しいほどである、といったこと。このように、彼は外国人コミュニティの中で生活するのではなく、日本の庶民の生活の中に入り、今まで西洋人に捉えられていた日本人像とは異なる日本人像を発信していった。ベルは言う。「日本人と共に暮らすならば、彼らが世界で最も誠実で高潔な人々であると気づくでしょう」<sup>28</sup>。

また、再来日の直後の1923年9月1日、関東大震災が発生した。その際、ベルは震災時の揺れの様子、自宅に戻るまでの町の惨状、人々の対応などを立て続けに3誌に寄稿している。ニュージーランド出身の彼は地震には慣れていたようだが、震災後の人々の相互扶助や整然とした姿に感銘を受けている様子が分かる<sup>29</sup>。

なお、ベルは必ずしも盲目的なジャパノフィリアではない。老年期の記事には日本社会、特に子どもたちへの教育への痛烈な批判も読み取れる<sup>30</sup>。ベルが日本をどのように見ていたのか、その見方は時代によりどのような変化を遂げたのか、比較文化論的視点からの考察も今後の課題である。

### 3-3. 英文学と日本文学の紹介者として

戦前のベルの功績のもう一つは、英文学を日本に紹

介し、また日本の近代文学を英訳し発表した点にある。

【表3】ベルによる文学関係の著作

- ① *Modern Short Stories*. Edited & Annotated by Eric S. Bell and Eishiro Hori、開拓社、1929
- ② *Eminent Authors of Contemporary Japan, One Act Plays and Short Stories Volume 1 and 2*. Edited by Eiji Ukai and Eric S. Bell、開拓社、1930

まず、①は前述の堀英四郎と共著で著したものであり、米英の著名な作家たちであるジェイムズ・ジョイス、オルダス・ハクスリー、シャーウッド・アンダーソン、マイケル・アーレン、セオドア・ドライサーの作品5編を収めたアンソロジーである。それぞれの作家からベル宛に出された出版許可の手紙も収録されている。それらの手紙から2通紹介する。

ハクスリー「本書が東洋と西洋の友好的な理解の一助となることを願う」

アンダーソン「日本人が我々の実生活のいくらかを知り、我々が日本人の実生活をより深く知ること、2か国の間に友好的な感情を生み出すという点において、いかなる外交努力よりも意味があるであろう。」

以上の手紙からも、ベルが①を通じて日本と西洋の特に市井レベルでのよりよい理解を図ることを念頭においていたことがわかる。

その翌年の1930年には、前述の成城学校の同僚である鶴飼盛治との共著で②を①と同様に開拓社から著す。これは、谷崎潤一郎、岸田国土、芥川龍之介、志賀直哉、山本有三、島崎藤村の15編を英訳し、原作と共に収録したアンソロジーである。英訳の半数近くが既に *Osaka Mainichi*, *Tokyo Nichinichi*, *Japan Times* といった英字新聞に発表済の再収録であるが、芥川の『鼻』と『秋』以外は全てベルらが全世界に先駆け初英訳したものである。恐らくベルの中では、①と②の2冊はセットになった構想であり、前者では米英の市井の人々の考え

方や生活様式を日本に紹介し、後者では日本の有様を世界に発信することで相互理解を図ろうとしていたと考える。

なお、これらの翻訳に関する考察、或いは著作の世界へのインパクトに関して論考する段階にはまだ至っていない。当時 *The Japan Advertiser* の副主筆で、後に駐日英国大使館の外交官として長く日本社会に根ざした H・V・レッドマンは、②の書評の中で、外国人によって書かれた日本に関する本は多くあるが、日本人によって書かれた日本についての本が翻訳されることは珍しく、それらの本からこそ学ぶべきことが沢山ある、と述べている<sup>31</sup>。一方、斎藤は、芥川作品の英訳に関して、②の中で5編翻訳されている旨を紹介した上で、「しかし同じ年に出版されたグレン・ショー氏の *Tales Grottsque and Curious* には芥川作品が十一篇収められているほか、訳者の理解に富んだ解説が付せられている。これは注目すべき業績であった。ただ芥川が戦前にどれだけ海外で読まれていたかという点、はつきりした統計を示すことは困難である。映画『羅生門』がグラン・プリを獲得して以来、この作品の原作者に対する関心が深くなったことは事実である」<sup>32</sup>と述べている。作品数、そして作品の解説の充実度から、ショーの作品と比べて低い評価になっている。しかしながら、②は世界中の少なくとも23の図書館に現在も保管され、出版後90年経った今でも時代を越えて人々に読み継がれていることから、その価値は再考に値すると考える。

#### 4. 日本での生活 戦中期

そのようなベルの奮励も空しく、日本は戦争に突入していく。

当時、ベルは神奈川県の大田に居住していたが、太平洋戦争が近づくとつれ、憲兵に目をつけられるようになる。横浜商業学校の卒業生で、後に朝日新聞の記者となった鈴木卓郎は、当時の様子を下記のように振り返っている。

エリック・S・ベルという生徒に人気のある教師がいた。大田に住んでいて誘われてなんだか遊び

にいて親しかった。その家からの帰り道に私服の憲兵にベル先生のことを詳しく聞かれた。憲兵は「スパイ行為をしていないか」と疑っていたようだが、私はベル先生をスパイとは思っていなかった。だが、先生は僕らにドイツ軍や日本軍は公式に発表されているように勝ってはいない、など普通には知りえない秘密情報を漏らして親英、反戦への世論誘導はしていたようだ。<sup>33</sup>

1941年12月8日、開戦と共にベルはスパイ容疑で検挙され横浜刑務所に拘置される<sup>34</sup>。開戦当日に検挙されていることから、それ以前からマークされていたことがわかる。ベルは戦後の1946年、マッカーサー元帥に宛てた手紙で「私はスパイとして非常に不当に投獄された。もちろんスパイではない」<sup>35</sup>とスパイ疑惑を完全に否定している。1942年春に一度釈放され自宅監視下に置かれるが、同年9月に根岸競馬場に開設された神奈川第一抑留所に抑留される<sup>36</sup>。そこでベルはタイザリッチと再会する。タイザリッチは1941年12月9日に神奈川第二抑留所に抑留されたが、その後第一抑留所に移動していた<sup>37</sup>。神奈川県外事部が1943年6月に作成した『第二次交換船で帰国希望の外国人名簿』によると、ベルは「残留希望スルモ帰国セシムルヲ可トス」<sup>38</sup>と答えたという。実際には第2次日英交換船は実施されず、ベルの抑留生活は続いた。

1943年6月、神奈川第一抑留所が北足柄村内山のマリア会山荘に移転する。内山での生活は食糧が乏しく、家族がいる者は月に1、2回程度差し入れが認められていたが、家族がいなかったベルにはお手伝いさんであったフジキ・トメや元生徒たちが差し入れにやってきた。内山に抑留された53名中、1名が病気で抑留解除、3名が1943年9月の第2次日米交換船で帰国、残りの49名中5名が栄養失調などで亡くなっている<sup>39</sup>。このような過酷な環境を生き延びた抑留者たちは1945年9月10日に解放され、辻堂の自宅が接収されていたベルはタイザリッチの茅ヶ崎の家に身を寄せる。

ベルが戦争について語った資料は限られている。第一抑留所の所長であった渡辺勝之助に対する横浜軍事

法廷での証言、財産処理の関係でGHQへ宛てた書状、家族への手紙があるものの、これらは一般大衆向けの言説とは言い難い。戦前、ジャーナリストとして日本の記事を発信していた彼が、戦後になり、戦時中の自身の身に起きたことを糾弾することはなかった。他の捕虜や抑留者による体験記を見てみると、まずは従軍記者やジャーナリスト出身者が記者としての使命感からか戦後すぐに発表をし、一般人は晩年になり、人生を振り返る時期になってようやく体験記として書くことができるようになるというケースが多いが、ベルはやはり真の意味でのジャーナリストではなかったのであろう。友人であった越谷達之助の歌曲集の中に、ベルの獄中詩が2編収録されており、越谷が曲をつけている<sup>40</sup>。その中の一つは「Rain! Rain!」というタイトルであり、大地への雨と、心の涙を並行的に詠んでいる。ベルの人生には常に音楽があった。戦中の体験を文筆で表現するのではなく、越谷の音楽に託したのは、音楽が自身の経験や想いを浄化させる唯一の方法であったからなのかもしれない。

1949年、甥のビル・ライトバンドはベルからの手紙を受け取る。そこには、抑留時代を経てもなお変わらぬ日本への愛情が綴られていた。

(クライストチャーチ) 大聖堂の鐘の音を聴いたとしても、教会を恋しく思わないだろう。むしろ、できるだけ遠くへ立ち去りたいと願うだろう。私はだいたい東洋化した。そしてそれを恥じていない。私は刑務所で地獄を経験した。抑留所では餓死目前であった。しかし、それでも私はこの土地を愛しており、他に移ろうとは思わない。(中略) この国で過ごした日々を一日たりとも後悔はしていない。刑務所で過ごした日々ですら。なぜなら、抑留生活は私に人間性とは何かを教えてくれたのだから。<sup>41</sup>

## 5. 日本での生活 戦後期

こうして戦後も、ベルは日本に留まり続けることを選ぶ。既に年老いた両親は世界しており、年長の姉兄

もそれぞれ家族を持っていた。さらに、ベルがジャーナリストとしてや教育者、文学の紹介者としての地位を築くことができたのは、日本という地にやってきたからこそであり、母国に帰ったところで、それらが保障されるかは不確定だったのである。しかし、戦後数年は接収されていた辻堂の自宅、及び財産の返還に奔走する日々となる。なお、ベルの財産が返還されるまでの粘り強く憤懣やるかたない長いプロセスについては諸々の資料が残されており、戦後の連合国財産処理を細緻に論考するうえでも有用な資料であると考え<sup>42</sup>。

1940年代後半、ベルはGHQ内の連合軍翻訳通訳部(ATIS: Allied Translator and Interpreter Service)で英語指導官として勤務するが、GHQが日本から撤退することは明らかであり、ベルは教職を求めていたと思われる。1950年1月、静岡県にある沼津精華高校(現学校法人沼津精華学園沼津中央高校)に着任する。成城学校の教え子、奥田良三の紹介であった。辻堂の家は1948年によく接収から返還されていたが、その家を去り、沼津に移り住んだのである。沼津の家には下宿生を何人も住ませ、常に生徒たちで溢れていたという。また、奥田や有能な音楽家たちを招いての学内コンサートも度々開かれた。ある生徒はベルの就任を下記のように記している。

ベル先生の就任は、全校生徒に生活の喜びとプライドをもたらした。先生の形式じみていない、のびのびとした明るい態度は魅力的である。授業中、生徒の瞳は生き生きと輝き、教室いっぱいに活気が流れる。(中略)「英語を通じて世界を知れ」とは先生の就任演説の要旨であったが、われわれは幸にもこのよき機会が与えられた。先生の人格を通して、世界の一端に触れるたのしさを味わっている。<sup>43</sup>

ベルの戦後の勤務校は【表4】の通りであるが、その他に沼津精華高校に隣接する株式会社富士製作所にも出講し、英語を教えていた。

【表4】ベルの戦後の勤務校

- ・沼津精華高校 (1950~1964)<sup>44</sup>
- ・沼津市立沼津高校 (1950~1964)<sup>45</sup>
- ・東京商船大学清水校 (1954<sup>46</sup>~1960<sup>47</sup>)

1954年5~8月、ベルは31年ぶりに母国への一時帰国を果たす。朝日新聞は大きく紙面を割き、「故郷のクライストチャーチ市にいる老婦を慰めるためだが、もう一つのねらいはまだ対日感情がほぐれていないニュージーランドの人たちに、今日の日本の姿を正しく認識してもらうため」<sup>48</sup>であると報じている。そしてその際、下宿生の加藤泰三郎を同行させている。姉のエヴェリンから「あなたが心から愛している日本の現状を実際に紹介する意味でちょうどいいからぜひ連れておいでなさい」<sup>49</sup>との助言があったという。さらに、奥田良三からニュージーランドと日本の民謡5曲を吹き込んだテープレコードの寄託を受けた他、日本全国から児童画300枚を集めニュージーランド学童との交歓展覧会を開くことを壮図していた。日本の一般庶民の有り様を示すことで、太平洋戦争で悪化したニュージーランドの日本に対する国民感情をやわらげることが眼目であった。

この様子はニュージーランドの新聞にも掲載されている<sup>50</sup>。ベルはニュージーランドでの取材に際し、日本が軍国主義から脱却した旨を説いたが、具体的にどのような反響があったかまではわからない。勤務校であった沼津精華高校の秋鹿重彦校長(当時)は、ベルの帰国について、「連れて行った加藤青年と共に日本の良い所をさかんに紹介しながら国際親善の役割をつとめて又日本に戻って来るのである。その国に自分はやっぱり住みつく事が出来ない。——私の心は日本にある。再び私の親しい人たちや愛する生徒たちのもとへ帰りたい。——とこの月末迄に本校へ帰任するベル先生である」<sup>51</sup>と綴っている。

また、1958年6~8月と1959年6~8月にも、勤務校であった東京商船大学清水校の実習船に乗船し、ニュージーランドに一時帰国している。なお、タヒチへ寄港時に譲り受けたタヒチブタがベルにちなんでマ

イア・ベルとパエ・ベルと名付けられ、その後、上野子ども動物公園で飼育された<sup>52</sup>。

ベルはその後日本とニュージーランドの関係修復に向けて、精力的に働きかけを行っていく。1962年9月には、ニュージーランド駐日テイラー大使を沼津精華高校に招待、1963年7月には沼津精華高校とクライストチャーチ・ガールズ・ハイスクールとの姉妹校締結を実現させる。クライストチャーチ・ガールズ・ハイスクールはベルの姉たちが通った学校であり、公私の違いはあるものの、同じ女子学校として相応しいとベルは判断したのであろう。

## 6. 晩年とその後

1964年5月22日、ベルは脳出血で倒れ、沼津市立病院に入院する。生徒たちは千羽鶴を折り、病室に飾り励ました。ベルは「ありがと、ありがと」と繰り返したという<sup>53</sup>。しかし、生涯独身であったベルは日本での縁者はもちろんなく、また、世話好きであったため蓄えも乏しかった。健康保険加入も非常勤講師であったり日本国籍でなかったがために困難を極め、政府やニュージーランド大使館に相談したが駄目だったという<sup>54</sup>。8月、勤務校であった沼津精華高校校長、市立沼津高校教頭、奥田良三らが後援会を結成し、かつての勤務校の同窓会に支援を呼びかける<sup>55</sup>。9月には、「ベル先生を救おう」と入院費カンパを募る記事が毎日新聞静岡版、朝日新聞静岡版、静岡新聞に掲載され、最終的に激励の手紙350通と約60万円が集まった。9月18日には静岡県知事から多年英語教育に尽くした労をねぎらい感謝状が贈られる。そこには「あなたは、大正12年4月ニュージーランドより来日以来こよなく日本を愛し、実に33年4か月の長きにわたってわが国の英語教育に尽くされた功績はまことに顕著であります。よってここに記念品を贈って感謝の意を表します」<sup>56</sup>と記されている。

多くの友人たちの支えも空しく、1964年10月5日ベルは逝去する。7日には秋鹿校長を葬儀長とし、秋鹿家ゆかりの沼津市内の蓮光寺で葬儀が営まれた。ニュージーランド副領事や霜田静志、教え子ら150名以上が参

列したその模様は、新聞テレビ各社でも報道された<sup>57</sup>。遺言には「仏式でもキリスト教式でも構わないが、必ず沼津に埋めるよう。また、葬儀はなるべく簡素にするように。それが私の切なる願いだ」<sup>58</sup>と書かれていた。

最期まで日本を愛して止まなかったベルは、1965年9月、蓮光寺境内秋鹿家墓地内に納骨された。

ベルが日本に残した足跡は、同窓生の間で語り継がれている。1989年6月5日、芦野宏は日本・ニュージーランド・フレンドシップ協会から招待を受け、親善コンサートを行うためにニュージーランドのオークランドを訪れる。芦野は、「こんなかたちで日本・ニュージーランド親善に尽くすことができ、しきりにベル先生のことを思い出していた」<sup>59</sup>と語っている。

2018年5月21日、ベルの兄チャールズの孫であるグラアム・ベル夫妻の来日に合わせて行われた蓮光寺での墓前祭には、沼津精華学園秋鹿敏雄理事長（当時）の働きかけで約30名の同窓生や関係者が参列した<sup>60</sup>。それに先立つ学内歓迎会では同窓生3名が在校生に向かってベルや沼津精華高校の思い出を語った。芹沢幸子さんは「私の83年の人生の中で、ベル先生との出会いは本当に良い思い出です。この歳まで元気に生きることができている、元気の源になっています」<sup>61</sup>と話された。横浜商業学校卒業生である藤本明さん（当時97歳）はグラアム夫妻が来日されているとの知らせを受け、「嬉しい情報を聴きましたが、このままでは‘カンマ’です。ぜひこのお話に‘ピリオド’をうちたい」<sup>62</sup>と、お会いできなければせめてお電話でもお話をしたい、と懇願され、英語で夫妻との面会を果たした<sup>63</sup>。

## 7. おわりに

戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

—国際連合教育科学文化機関憲章前文—

教職の経験も著述の経験もなかったベルであったが、日本に来てから多彩な能力を発揮し、成功を収める。ベルにとって日本は、潜在的な才能を開花させ、新た

な自分を獲得していく場であった。そして、自身が日本で経験した実情と、ニュージーランド、オーストラリア、ひいては西洋における日本に対する認識に乖離を感じたベルは、戦前においては日本の市井の人々の営みをいち早くジャーナリズムや文学作品の翻訳を通して世界へ発信し、戦後においては人々の実際の交流を生み出す場の提供に奔走する。

晩年の1958年、ベルはこう記している。

わたくしはこの長い年月のあいだ、日本の子どもたちを取扱って来たが、その際いつもニールの見解に従って自己の最善をつくして来た。それによって相当の成果をあげ得たと信ずる。それによってわたくしが、英語を教えているあいだに、日本の子どもたちから愛と信頼とを得たことは大きな成功であったと信ずる。英語教育と人間教育と、そのいずれが重要であるかをわたくしは知らない。しかしわたくしは、英語を学んだことよりも、愛と信頼を学んだということの方が、むしろ、より以上重要なのではないかと感ずる。<sup>64</sup>

「英語」を教えるのではなく、「英語を通して愛と信頼」を教える。ベルは、戦前・戦中・戦後期を通して、一貫して日本やニュージーランド、そして西洋の人々の心に「平和のとりで」を築こうとしていたのだ。

本稿は、ニュージーランド出身であるエリック・スチュアート・ベルの日本での半生を取り上げ、日本とニュージーランドの関係において彼が果たした役割と、日本社会へもたらした影響についての考察を試みた。日本とニュージーランドの複層的な繋がりを理解するためにも、引き続き、市井で培われてきた様々な営みに目を向けていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、以下の方々のご厚意を授かった。まず、グラアム・ベル氏にはベル家の貴重な資料や情報を惜しみなくご提供いただいた。氏がエリック・

スチュアート・ベルの調査を筆者に依頼してこなれば、筆者がエリックと出会うことはなかったであろう。抑留時代に関してはPOW研究会の小宮まゆみ氏から情報提供を授かった。また、学校法人成城学校の栗原卯田子前校長、横浜市立横浜商業高等学校の長田正剛前校長、学校法人沼津精華学園の秋鹿敏雄前理事長には学校に残る貴重な資料をご提供いただくと共に、関係者の呼びかけにもご尽力いただいた。改めて感謝の意を表したい。

<sup>1</sup> McNeil, Ken. "The Nineteenth Century Voyages of His Imperial Japanese Majesty's Navy Training Ships to New Zealand." 『日本ニュージーランド学会誌』第2巻、1996、pp.55-71。McNeil, Ken. "A Brief History of Japanese in New Zealand." 『日本ニュージーランド学会誌』第3巻、1997、pp.60-79。

<sup>2</sup> ジェームズ・ビーティー、及川敬貴、「ニュージーランドの保健制度改革と日本の「つながり」—フレデリック・T・キングの1904年日本訪問とその影響—」、『日本医史学雑誌』第57巻第3号、2011、pp.305-323。

<sup>3</sup> 日本においては「エリック・エス・ベル」「エリック・S・ベル」「エリック・ベル」等の表記が見られる。また、ペンネームとして「Isamu Suzuno」も使用された。

<sup>4</sup> 沼津市蓮光寺にあるベルの墓碑には誕生年が1890年と刻まれているが、グラアム・ベル氏提供の母国の出生証明書によれば1887年となっている。

<sup>5</sup> 霜田静志、『ニールの思想と教育』、金子書房、1959、pp.273-274。

<sup>6</sup> Tytheridgeの日本語表記は資料によって20以上みつまっているが、本稿ではタイザリッチを使用する。

<sup>7</sup> Jane, Philip. *An Historical Survey of the Establishment of an Orchestral Tradition in Christchurch to 1939*. University of Canterbury Phd Thesis, not published, 2009.

<sup>8</sup> 霜田、前掲書、p.276。

<sup>9</sup> "Oriental Arts. New Companies." *Finance and Commerce Press* Volume LVI, Issue 16895, 24 July. 1920.

<sup>10</sup> 東京商科大学、『東京商科大学一覽』、1922、p.105。

<sup>11</sup> McNeil, Ken. "On the 100th Anniversary of the First Japan Boom : Constructing images of Japan in New Zealand 1899-1905." 『日本ニュージーランド学会誌』第13

- 卷、2006、p.30。
- <sup>12</sup> ビーティー&及川、前掲書、p.308。
- <sup>13</sup> 「成城学校80年」編纂委員会編、『成城学校80年』、成城学校、1965、p.18によれば1922年6月1日に着任。
- <sup>14</sup> 同上書によれば、タイザリッチも1922年11月から成城学校に勤務している。
- <sup>15</sup> 霜田、前掲書、p.2。ベルは霜田が1949年から1950年にかけて大日本雄弁会講談社から出版した『ニイル叢書』（第1巻～第6巻）の全ての巻においてIntroduction（紹介の言葉）として文章を寄せている。
- <sup>16</sup> 奥田良三、『こころ、祈り、歌、わが人生』、芸術現代社、1989、p.121。
- <sup>17</sup> 芦野宏、『幸せを売る男 私のシャンソン史』、NHK出版、1998、p.32。
- <sup>18</sup> Bell, Eric S. “A Foreigner’s Impression of a trip with the boys of Second year.”『成城』第62号、1931、pp.31-34。
- <sup>19</sup> なお、『大東亜戦争勃発に伴う外事警察非常措置情況』にはベルの職業が「慶大教師」と記載されているが、勤務状況の確認は取れなかった。
- <sup>20</sup> 法政大学、『法政大学一覧自大正14年至大正15年』、1926、p.122。
- <sup>21</sup> 横浜市立横浜商業専門学校編、『横浜商業専門学校一覧昭和5年度』、1930、p.38。
- <sup>22</sup> 早稲田大学大学史編集所編、『早稲田大学百年史』第4巻、p.873、「第六十八表 教員就退任および担当科目（大正九年四月—昭和二十四年三月）」[https://chronicle100.waseda.jp/viewer.php?img\\_name=4\\_0853.jpg](https://chronicle100.waseda.jp/viewer.php?img_name=4_0853.jpg)（参照2021.11.18）
- <sup>23</sup> 伊村元道、『パーマーと日本の英語教育』、大修館書房、1997、p.183。なお、本書では①がパーマー編として記されているが、これは誤りである。
- <sup>24</sup> 江利川春雄、『英語と日本軍』、NHK出版、2016、pp.111-113。
- <sup>25</sup> “To Live in Japan.” *Hawera & Normanby Star* Volume XLII, 24 February. 1923, p.4.
- <sup>26</sup> D・C・S・シソング、堀江芳孝訳、「カウラ捕虜キャンプの反乱」、『歴史と人物 増刊 証言・太平洋戦争』、中央公論社、1984、p.242。
- <sup>27</sup> 岡田泰治、「D・H・ロレンスの見た『シドニー港の日本船』について—A Nippon steamerは日本の汽船カー—」、『帝塚山学術論集』第一号、帝塚山学院大学経済学部学術会、1995、p.7。
- <sup>28</sup> “The Real Japan.” *Townsville Dailey Bulletin (QLD)* 2 February. 1923, p.3.
- <sup>29</sup> “Impressions and Experiences.” *Daily Telegraph (TAS)* 22 November. 1923, p.7.
- <sup>30</sup> エリック・S・ベル、「よごし回る修学旅行」、朝日新聞、1954年5月16日、p.3、エリック・S・ベル、「在日外人教授のみた日本の幼稚園児」、『保育』1956年2月号、p.15など。
- <sup>31</sup> “Plays and Narratives of the Modern Japan.” *The Japan Advertiser* 19 August. 1931, p.4.
- <sup>32</sup> 斎藤襄治、『日本の心を英語で —理論と実践—』、文化書房博文社、1988、pp.79-80。
- <sup>33</sup> Y校百十周年記念誌編集委員会編、『Y校百十年』、1992、p.137。
- <sup>34</sup> 神奈川県外事部、『大東亜戦争勃発に伴う外事非常措置情況』、1942年5月、p.15。
- <sup>35</sup> Bell, Eric S. Letter to General MacArthur, The United States Embassy Tokyo Japan 5 Jan 1946. GHQ/SCAP Records (RG331 National Archives and Records Service) Box no 4829, Folder 23 095 Bell Eric S April 1946-Jan 1949, 国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- <sup>36</sup> 神奈川第一抑留所については小宮まゆみ、『敵国人抑留戦時下の外国民間人』、吉川弘文館、2009が詳しい。
- <sup>37</sup> 神奈川県外事部、前掲書、p.20。タイザリッチは戦前は既述の東京商科大学、成城学校の他に、法政大学や澤柳が学長を務めた大正大学で教鞭をとっていた。
- <sup>38</sup> 神奈川県外事部、『第二次交換船で帰国希望の外国人名簿』、1943年6月。
- <sup>39</sup> 亡くなった抑留者の1人であるフランク・ジョナ・ケイキについては拙稿「フランク・ジョナ・ケイキの生涯」<http://powresearch.jp/news/wp-content/uploads/FrankJonahKeiki.pdf>（POW研究会HP）を参照されたい。なお、2019年、ケイキともう1人の死者であるエムリーの墓石が有志たちの手で抑留所跡地に建立された。「山北フィールドワークの記録」<http://powresearch.jp/news/wp-content/uploads/Yamakitafieldwork.pdf>（POW研究会HP）
- <sup>40</sup> 越谷達之助、『越谷達之助歌曲集 日本の哀愁』、私家版、1977、p.40。注では「多くの獄中詩を残した」と書かれているが、見つかってはいない。
- <sup>41</sup> 1949年8月14日付、ベルからビル・ライトバンドへの手紙。グラム・ベル氏提供。
- <sup>42</sup> GHQ/SCAP Records, (RG331, National Archives and Records Service) Box No 3967 Folder 32 Bell Eric Stewart July 1944-Jan 1949, 国立国会図書館憲政資料室所蔵、など。
- <sup>43</sup> 沼津精華高等学校、『華 創立60周年記念誌』、1984年、p.62。
- <sup>44</sup> 同上、p.60。
- <sup>45</sup> 同上、p.60。
- <sup>46</sup> 海洋会、『海洋』571号、1954年9月30日、p.27。

- <sup>47</sup> 海洋会、『海洋』633号、1964年9月30日、p.43。
- <sup>48</sup> 「日本の青年を連れて」、朝日新聞、1954年4月6日、p.7。
- <sup>49</sup> 同上、p.7。
- <sup>50</sup> “NZ accent puzzles young Jap visitor.” *Evening Post (Wellington)* 9 June. 1954, p.12.
- <sup>51</sup> 秋鹿重彦、『酒煙堂随筆』、私家版、1978、p.182。
- <sup>52</sup> 上野動物園、「どうぶつと動物園」、1961年5・6月号。なお、現在上野動物園ではタヒチブタの飼育は行われていない。(2017年2月7日公益財団法人東京動物園協会恩賜上野動物園教育普及課よりメール)
- <sup>53</sup> 「病床の親日外人教師にカンパ」、静岡新聞、1964年6月11日。
- <sup>54</sup> 「‘ベル先生を救おう・・・’」、朝日新聞 静岡版、1964年9月16日、p.16。
- <sup>55</sup> 海洋会、『海洋』633号、1964年9月30日、p.43。
- <sup>56</sup> 年代や年数には誤りがあると思われる。
- <sup>57</sup> 「記念碑計画進む」、毎日新聞 静岡版、1964年10月8日、「しめやかに故ベル先生の葬儀」、静岡新聞、1964年10月8日。
- <sup>58</sup> グラアム・ベル氏提供。
- <sup>59</sup> 芦野、前掲書、p.26。
- <sup>60</sup> 「市内で英語教えたベル先生」、沼津朝日新聞、2018年5月27日、p.2。
- <sup>61</sup> 秋鹿敏雄氏提供。
- <sup>62</sup> 長田正剛氏提供。
- <sup>63</sup> 木下こゆる、「敵国人として抑留 大叔父の生涯知る」、朝日新聞 神奈川版、2018年6月18日、p.21。
- <sup>64</sup> 霜田、前掲書、pp.277-278。